

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：13201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K03006

研究課題名(和文) 英語教師の省察を促す「授業研究」の機能とあり方に関する研究

研究課題名(英文) A Study on the Function and Approach of "Lesson Study" to Encourage

研究代表者

岡崎 浩幸 (OKAZAKI, HIROYUKI)

富山大学・学術研究部教育学系・教授

研究者番号：20436801

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果は2つに分けることができる。まず、授業参観時には、生徒の姿に焦点を当て、学びが成立しているのかどうかを確認するために、授業を参観することが重要である。その際に、成立している場合やそうでない場合について、その原因を考慮しながら参観を行う。次に、授業後の協議会においては、教師全員が生徒の反応とその意味付け(解釈)について語り合い、互いの異なる視点からの見方や解釈を共有する。これにより、教師の学びが他人事ではなく、自分自身の問題として追求することができる。また、参観者の教師がこのプロセスを経ることで、授業の改善や教師の成長につながる事が明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本の授業研究は「レッスンスタディ」として世界中に広まっているが、近年は多忙化などにより形骸化し、授業研究で得られる学びが必ずしも日々の実践に反映されないと指摘されている。本研究では、高校英語教師の授業研究の特徴を分析し、コルトハーヘンの「8つの窓」を参考に導入した。それにより、授業者の教師の思いに寄り添い、授業中の生徒の反応に焦点を当てることで、授業後の協議会におけるリフレクションの質や深さに変化が見られるようになった。この成果を基に、授業観察の方法、協議会におけるどのような視点に重き発言すべきかを示し、授業研究に取り組むことが学びの質向上、教師の成長につながる事が分かった。

研究成果の概要(英文)：The outcomes of this research can be divided into two main aspects. Firstly, during classroom observations, it is crucial to focus on students' engagements and reactions to determine the effectiveness of their learning. The act of observing the classroom allows for the assessment of whether learning is taking place, taking into account the causes behind its success or lack thereof. Secondly, in post-lesson conferences, it is important for all teachers to engage in discussions regarding students' reactions and their interpretations. This exchange of different perspectives and interpretations enables teachers to view their own learning as a personal matter to be pursued. Furthermore, it has been revealed that the engagement of observer teachers in this process contributes to the improvement of classroom instruction and facilitates the professional growth of teachers.

研究分野：英語教育学

キーワード：高校英語教師 授業研究 省察 授業後協議会 リフレクション

1. 研究開始当初の背景

日本の小学校、中学校における「授業研究」は世界から注目を浴び、世界各国において教職の専門職性を開発する最も有効な方法として、養成教育と現職教育の双方で活用されている(佐藤,2015)。佐藤他(2013)によれば、欧米諸国では高校の授業研究は小学校、中学校と同様、もしくはそれ以上に活発であるのに対して、日本では皆無に近い状態が続き、様々な国際比較調査を見る限り、日本の高校の授業研究(研修)の機会は世界最下位に落ち込んでいる。また「高校生生の勉強に関する調査」(日本青少年研究所,2010)の比較調査によると、「授業中、居眠りする」と回答した日本の高校生は45%にのぼり、米国(21%)中国(5%)より多い。これは日本の高校の授業が生徒の学びに結びつかず効果的に実施されていない一端を表している。英語力においても「読む」「聞く」がアジアで下から4番目、「話す」「書く」が最下位となっている(伊東,2016)。このままでは大学入試が改革されたとしても、これまでと同様の一斉授業で多くの生徒が置き去りにされたまま、得点を取るためだけの受験対策が発展するに終始することになる。中学高校の9年間を無駄にせず、一人一人の生徒の学びを保証するために、OTJによる授業改善が急務である

2. 研究の目的

本研究は中学高校の英語教師の省察を促す「授業研究」の機能とあり方に関する研究である。研究の目的は2つある。一つは英語科校内研修や研究授業における「授業研究(レッスン・スタディ)」を通して、英語教師(授業者と参観者)が何に気づき、何を学び、どのように授業実践力を向上させていくのかを探求することである。二つ目は英語教師の成長に寄与する授業研究会の機能やあり方についての知見を得ることを目的とする。さらに、中学高校の英語教師にとって、省察の深まりによって授業改善につながる「授業研究(レッスン・スタディ)」の方法やあり方の普及を目指す。

3. 研究の方法

最初の2年で、主たる研究対象である授業研究後の授業者、参観者からのデータを収集・分析する。

29年度：研究協力校(富山県指定の研究拠点校)の英語科校内研修及び研究授業後の「授業研究」を通して、英語教師は何に気づき、何を学び、授業がどのように変化するのかのデータを集める。

30年度：研究協力校から継続してデータを集め、より実りある「授業研究」のあり方(方針と枠組み)を検討する。

31年度：30年度、29年度から得た知見をもとに、授業研究の方法を改善して他の中高で実践しながら普及を図る。

4. 研究成果

1年目の研究では、32名(中学18名、高校14名)の英語教師に、次の3つの質問をした：1)英語授業の良否を確認するのに自分の実践をどのように振り返っているのか、2)授業や言語活動の良否にかかわる要因は何か、3)何を拠り所にして授業改善に取り組んでいるのか。結果として、教師は主に活動中の生徒の反応、パフォーマンスや授業の目的がどの程度達成されたのか、生徒が授業中にどの程度英語を使ったのかなどに基づいて省察を行っていることがわかった。また、授業や言語活動の良否は、適切な授業準備や目標設定、生徒理解の深さに左右されることも分かってきた。さらに、教師の多くは先輩教員や同僚に改善のアドバイスを求めたり、書籍、インターネット、公的や自主研修への参加を通して自分の授業実践に改良を加えたりしていることも分かった。また、英語教師の授業研究(事後検討会)では、どのような発言がなされているのか、どのような発言が教師の学習や成長に繋がっているのかを分析した。その結果、1)生徒の発言や行動などの事実確認やその内容や意義について解釈した発言、2)教師のとった方略(手立て)や生徒への対応についての事実や解釈した発言、3)問題点の指摘、4)代案の提示、5)授業の見方やあり方に関する視点の確認に関する発言であることが明らかとなった。

2年目の研究では、4つの高校で行われた授業後協議会に参加した16名の英語教師の発言を質的に分析した。協議会で扱われたテーマや発言内容から教師の教え方だけでなく、タスクに取り組む生徒の様子にも焦点を当てていることが分かった。また、教師の発言(省察)を3つのレベルに分けて分析した結果、授業で起こったことを単に描写しているレベル1のコメントは42.4%を占め、描写だけでなくその理由や解釈も加えているレベル2は48.5%、状況を分析し妥当な代案を提示しているレベル3が9.1%でより高い省察レベル(2,3)に達しているコメントが57.6%を占めた。今回の授業研究の試みが教師の授業改善や成長に寄与する可能性が示唆さ

れた。このような授業研究の機会を年数回設け、省察が促される協議会のシステムを構築することで、高校英語教師の授業改善や成長に結びつくことが分かってきた。

3年目以降の研究では、2018年に実施された授業後検討会における英語教師の発言を異なる視点から分析した。大谷(2008)が開発した質的データ分析方法(SCAT)を援用し、参観者10名の高校英語教師の発言をもとにストーリーライン作成し、授業研究(授業参観や授業後協議会)から何を学び、それを今後の自己の授業実践にどのように生かそうとしているのかを明らかにした。参観者は授業参観後、3つのグループに分かれて全員が2分程度、付箋のメモもとにそれぞれ気づきを語り合った。参観者教師の省察において共通する3点が明らかとなった。

1) 参観者は、生徒の意欲向上、理解度の深化、活動への取り組みやすさなど生徒の目線から、授業者の指導や手立てを評価していることが分かった。これは今後の自己の授業にも取り入れ生徒の意欲向上、理解の深まり、活動への取り組みやすさの向上へとつながると考えられる。

2) 授業者の思いや願い(今後改善したいこと)に応じるために、授業の実態に即した具体的な代案を参観者の教師の多くは示した。このことは自分が似たような問題に面した時に自分事として解決案を工夫するのに役立つことになる。

3) 参観授業で課題と思われる点を指摘する際、生徒の学ぶ姿をもとに代案を示した。これはメタ認知的に自分も似たような課題に面した際に解決案を考えることに結びつく可能性がある。

これらの研究結果から、定期的な授業研究の機会を設け、省察を促す協議会のシステムを構築することが、高校英語教師の授業改善と成長につながるということが分かった

参考文献

Korthagen, F. A. (1985). Reflective teaching and preservice teacher education in the Netherlands. *Journal of Teacher Education*, 36(5), 11-15.

佐藤学・和井田節子・草川剛人・浜崎美保編(2013)『授業と学びの大改革「学びの共同体」で変わる! 高校の授業』東京: 明治図書

Shön, D. (1983). *The reflective practitioner: How professionals think in action*. New York: Basic Books.

千ヶ布敏弥 (2014). 「第I部 1 校内研究としての授業研究の現状と課題」日本教育方法学会(編)『授業研究と校内研修-教師の成長と学校づくりのために-』(10-21頁) 東京: 図書文化.

Clark, C. M. (2001). *Talking shop: Authentic conversation and teacher learning*. New York: Teachers College Press.

石上靖芳・前島純司・黒柳幸夫(2014). 「校内授業研究事後協議会における教師の学習に関する事例研究: グループ協議における対話的相互作用に着目して」『静岡大学教育学部研究報告. 教科教育学篇』第46号、77-91.

金子幹夫. (2014). 「高等学校における研究授業の在り方に関する一考察: 研究授業で高校教師は何に注目しているのか?」『東京学芸大学教職大学院年報』第3集, 37-48.

Saito, E., Murase, M., Tsukui, A., & Yeo, J. (2014). *Lesson Study for Learning Community: A guide to sustainable school reform*. Routledge.

Sato, M. (2011). Contemporary innovation of lesson study. In National Association for the Study of Educational Methods (Eds.), *Lesson study in Japan* (pp. 142-150). Keisuisha.

鹿毛雅治 (2017). 「第1章 授業研究を創るために」鹿毛雅治, 藤本和久(編)『「授業研究」を創る: 教師が学びあう学校を実現するために』(2-24頁). 東京: 教育出版.

田村学 (2017). 「第9章 「授業研究」の質的転換: 「学校の学び」の観点から」鹿毛雅治, 藤本和久(編)『「授業研究」を創る: 教師が学びあう学校を実現するために』(144-148頁). 東京: 教育出版.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 岡崎浩幸	4. 巻 15
2. 論文標題 授業改善につながる高校英語教師の授業研究に関する一考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 富山大学人間発達科学部紀要	6. 最初と最後の頁 133-139
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Hiroyuki OKAZAKI	4. 巻 50
2. 論文標題 High School English Teachers' Reflections Through Lesson Study	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中部地区英語教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 137-144
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岡崎浩幸、加納幹雄	4. 巻 47号
2. 論文標題 英語教師の省察と授業改善に関する研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 中部地区英語教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 41-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 岡崎浩幸、加納幹雄
2. 発表標題 授業改善につながる高校英語教師の省察に関する一考
3. 学会等名 中部地区英語教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岡崎浩幸
2. 発表標題 高校英語教師の授業力量形成につながる授業研究における省察に関する研究
3. 学会等名 全国英語教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岡崎浩幸、 加納幹雄
2. 発表標題 英語授業研究の事後協議会における教師の省察過程に関する研究-非授業者の省察過程の特徴に着目して-
3. 学会等名 中部地区英語教育学会静岡大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岡崎浩幸
2. 発表標題 英語授業研究の事後協議会における英語教師の省察と学びに関する研究 授業参観者の発言と学びに注目して
3. 学会等名 全国英語教育学会 第44回京都研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岡崎浩幸
2. 発表標題 授業改善のためのリフレクション
3. 学会等名 富山英語指導法勉強会 第196回
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岡崎浩幸、加納幹雄
2. 発表標題 英語教師の省察による学びと成長
3. 学会等名 中部地区英語教育学会長野大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	加納 幹雄 (KANO MIKIO) (70353381)	岐阜聖徳学園大学・教育学部・教授 (33704)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------